



上徳不徳

特異な日本人・私の思考遍歴

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず 大石 久和



ユーラシア大陸では、都市城壁という莫大な費用と労力を要する今日でいうインフラストラクチャーを発明せざるを得ず、それが今日ヨーロッパなどでは、社会を支える基礎層としてインフラストラクチャーを理解していることにつながっている。

しかし、その経験のない日本人がインフラ概念を獲得できないのも、こうした経験を欠いているからだと同様までに説明してきた。都市城壁を必要とする経験とは、頻繁な殲滅の意思を持つ異民族などの敵との遭遇なのだが、その戦いの厳しさは、紛争における死者数に現われており、実際、海外では凄まじい数の虐殺が行われたことを紹介した。

こうした事実を、よく「日本は島国だから」と説明するがそうではない。正しくは「日本は大陸からの離間距離が200kmもあったから」が正解だ。イギリスは、大陸からの距離が30kmしかないために、常にヨーロッパ大陸の一部としての歴史を歩んできた。同じ島国のようでも、日本は大陸の一部としての経験がほとんど皆無なのである。

世界から乖離している日本人

同じ島国のイギリス人は、大陸との頻繁な折衝・交渉・紛争などにより「世界民」となっ

たのだが、大陸から切り離された日本人は世界民にはなれなかったのだ。その結果、ある面では「世界のなかでの不思議な日本人」となってしまったのだ。

「日本人は論理的でなく、長期的視野もなく、彼らと関係を持つのは難しい。日本人は単調で、頭が鈍く、自分が関心を払うに値する連中ではない。」

これは、アメリカの外交官であり、大学教授でもあったヘンリー・キッシンジャーが特に安全保障認識に関して、仲間のアメリカの大学教授にもらした日本人評である。前回に説明したような民族の長年にわたる経験の差が、彼にこのような思いを持たせたのだが、それは、われわれ日本人の考え方や行動と彼らとのどのような違いなのだろうか。

本欄の読者は、インフラの重要性を繰り返し強調するヨーロッパやアメリカの指導者と比較して、わが国の政治家たちがインフラという言葉をもったく使えず、インフラの形成手段でしかない「公共事業」としか言えないこと（それも最近では、ほとんど否定的な論調で語っている）という対比で、彼我の違いの大きさを実感していると思う。

彼我の違いは、他にもいくつも思考や感性の深部からの違いとなって、いろいろな局面に現れている。誤解のないように付言してお

かなければならないが、日本人は優秀でないとか言っているのではない。能力の発揚の仕方が西欧人などとは異なると言っているのである。それが、キッシンジャーなどの感想になっているということなのだ。

ここは全日本建設技術協会の「建設」という媒体のコラムなのだが、頭の体操的に以下を読んでいただきたい。国土の態様が異なることと、その国土の違いが民族の経験の違いを生み出し、独特の民族を作りだしたと考えている。

したがって、以下の日本人論に類書は存在していない。

異なる感覚

彼我の間には感じ方の大きな違いがある。逐次、具体例で説明したい。

歴史観「流れ去る歴史と積み重なる歴史」

日本人は、NHK歴史ヒストリアでは「歴史とは大河である」とナレーションしていたように、「歴史とは時間とともに流れ去るもの」ととらえているが、西洋では「歴史とは過去に積み重なるもの」と理解している。なぜ、そのようなことが言えると考えているのか、という背景が以下の通りである。

江戸の風景は、関東大震災でほとんど消え去って今日に残っていない。川の流れのように流れ去り、消え去ったのである。大災害が頻繁に襲うわが国では、洪水・地震・高潮・津波に加え、大火災によって、過去は完全に、かつ、たびたび消滅する。

ところが、西欧はそうではない。たとえば、有史以来大地震がないパリでは、地震で過去の街全体の面影が消え去った経験は一度もし

ていない。また、洪水でも、セーヌの洪水は頻繁に生じていたが、流域面積が広いため一挙に何もかも押し流してしまうわが国のような激流となる洪水はあまり経験していない。

したがって、現在のパリはナポレオン三世（1808～1873）が、近代都市に最も重要な都市施設は街路であることを理解していたオスマンを用いて、都市内道路を大胆に整備して大改造した姿をそのまま留めている。

このように、過去の姿はいつまでもそのまま存在し続けるのである。したがって、近年のパリのデファンス開発も、過去の上に新たに積み重なったものと考えてるのである。

いま、パリジャンが歩いているすぐ横の、このパンテオンで1851年には、レオン・フーコーの振り子実験が行われ、その時間軸の延長上に私はいるという感覚なのだ。ここでは歴史は過去に積み重なっていくものなのである。

「方丈記」大好きと過去の発言や行動の軽視

鴨長明の「方丈記」は日本人の持つ感覚を見事に表現しており、いつの時代にもファンが多い。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし」という表現は、いまの私達の感覚でもある。

これに共感するわれわれは、過去の発言や行動に無関心であり、かつその責任を問わない。たとえば、今日の沖縄の普天間基地問題の混乱は、鳩山由紀夫元総理の実に無責任な「最低でも県外」発言に端を発するが、その責任を追及する声は聞こえてこないのである。（次号に続く）